

昆陽漫錄〓青木昆陽

統昆陽漫錄〓青木昆陽

統昆陽漫錄補〓青木昆陽

南嶺遺稿〓多田義俊

南嶺遺稿評〓伊勢貞丈

秉穗錄〓岡田挺之

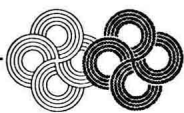
20

日本隨筆大成

第一期

吉川弘文館

日本随筆大成 第一期 第十卷
昭和三年一月三十日発行
編纂者 日本随筆大成編輯部
代表 早川純三郎
発行者 吉川半七
発行所 日本随筆大成刊行会



日本随筆大成

〈第一期〉20

昭和五十一年六月三十日 印刷
昭和五十一年七月十五日 発行

編者 日本随筆大成編輯部

発行者 吉川圭三

発行所 株式会社 吉川弘文館

〒113 東京都文京区本郷七丁目二番八号
電話東京八一三一九一五（代表）
振替口座東京〇一二四四番

製作 株式会社 たんちょう社

解題

本集には、昆陽漫録、統昆陽漫録、統昆陽漫録補、南嶺遺稿、南嶺遺稿評、秉穗録の六種を収める。

昆陽漫録 六卷

青木あおき昆陽こんよう 著

統昆陽漫録 一卷

同 著

統昆陽漫録補 一卷

同 著

本書は儒者であり、実用經濟の学を以て一生を貫いた、幕臣青木昆陽の隨筆である。昆陽漫録は、宝曆十三年の自序にある様に、元文中に先ず第一卷が成り、其後の小著を取捨再校して六卷となして本書は成ったのであった。統昆陽漫録の方は無窮会神習文庫の奥書に「明和三年十一月青木敦書記す」とあり、又同じ神習文庫本の補冊の末には、「統昆陽漫録ニ収メズ、及ビ近比觀タル事ヲ書集メテ、一冊トナシ、統昆陽漫録補トス。明和五年九月朔 青木敦書記」とあるから、其の雜抄手録は、年と共に増加していったと思われる。

さて本書再刊に当って、内閣文庫、静嘉堂文庫等の蔵本を以て比較したのであるが、内閣文庫には一冊本ながら、自筆献上本と云うのがあって、此には四項目であるが、増補記事があった。本文の方

に注記を書き加えたのを見られたい。昆陽は元文四年仰せにより甲斐其の他に古文書をたずね、之を献じて居り、延享四年には評定所の儒者の列に加えられている。これら数年の古文書及び見聞の記録の備忘は年と共に多くなり、この昆陽献上本と云う事実もあり得る事と思われる。其れによってまた思い合せられる事は、第一巻の巻頭の「周易家語序」の文章である。これは家康が慶長四年に孔子家語を、十年に易経を刊行せられたことを賞し、「神祖干戈ノ中トイヘドモ聖經ニ御心ヲ用ヒラル、ノ深キヲシル。云々」と陳べている。この家康の古書刊行のことは、ここばかりでなく、続昆陽漫録補の初の「貞観政要」のところにも「神祖ノ政事、古今ニ勝リ給フコト知ルベシ」と云い、又「群書治要」の所にも「神祖ノ大徳コノ書ヲ刊行セラレ、後ニコノ板ヲ紀府ヘ賜フトカヤ」とも云っている。ここには儒者として又幕臣としての昆陽の姿が現われていると思われる。然し昆陽は単に儒道のみを以って身を立てた人ではなかった。實用経済の学を旨とした。本艸学、朝鮮及び蘭書にまで、其の見聞を博くして見聞を抄記したものが、この昆陽漫録である。「七音」の条には、「敦書紅毛文字ヲ紅毛人ヘ尋ヌルニ、紅毛文字ノ寄せ合せ、ミナ五音ナレバ、西土ノ五音ハ西域ノ音ニヨルコト明ナリ。委クハ、敦書著ス所ノ和蘭文字略考ニテ、考ヘ知ルベシ」と云っている。而してこの『和蘭文字略考』は、自筆本が静嘉堂文庫大槻本の中に現蔵されている。最近杉村つとむ氏は「新井白石は果して〈蘭語〉を学んだか」(『近世の学藝』所収)を執筆せられたが、そのなかで、「昆陽が伊藤東涯から語学的訓練を受けた語学者として『和蘭文字略考』を著述したが、白石のものとはまったく比較にならないほどしっかりしたものである……」と賞して居られる。昆陽の博識は和漢の古典は勿論、蘭書にまで及び、それが取とめもなく集められて本書は成っている。その詳細は本文にゆずるとしても、もう一つ定西法師伝を逸早く紹介しているのを注意して、この内容の窺見の筆を擱きたいと思う。「定西法師

伝」は今は改定史籍集覽第十二冊に収められて、その全文は簡単に見る事が出来る興味深い話である。最後に再刊に当って参照した静嘉堂文庫本に、橘亮卿写本六冊本がある。この本は「江沢文庫」及び「森氏開夢冊府之記」、江沢文庫の方は其の人を明かにしないが、森氏は立之で、号枳園、福山侯の医官で、書誌学者としても知られていた。もう一つ大槻本中の続昆陽漫録の方は、大槻文彦博士の明治四十五年の識語に、「青木先生の後裔の青木あきより購ひ得て珍藏す」とあるが、此れは自筆本ではない様である。

青木昆陽 名は敦書あつし 通称文蔵、半五郎、昆陽は号で、又一般に蕃薯先生として親しまれている。父は佃田屋半右衛門と云って魚問屋であったと云い、母は町医師村上宗伯の女という。元禄十一年五月十二日に生れた。幼年より学を好み、京洛に赴いて、伊藤東涯の門人となり、其の学問の基礎を開いた。江戸に帰ってから与力で国学者であった加藤枝直の地内に住し、枝直の推挙により大岡越前守忠相の知を得、処士にして『蕃薯考』及びその国字訳の書を著わし、有徳院殿（徳川吉宗）の上聞に達し、小石川の御薬園にこれを試作せしめ給い、農民にもこれを作る事を教え、窮民にも飢える事なからしめた。享保二十年には書物写する事を承わり、元文五年には寺社奉行に属し、甲斐、信濃、遠江及び関東の国々の古書を索ねて献ずる事などに骨を折った。明和四年二月には御書物奉行の重任をも仰せつかった。昆陽が早くから海外の学芸に眼を向け、此を自ら身に修めたその炯眼は殊に賞せらるべきであろう。明和六年十月十二日歿した。享年七十二、法名一清、三田済海寺に葬られた。前野蘭化や仙台の医家工藤平助など、異色の門人もあり、著書も『経済纂要』二十巻其の他多い。本稿を草するに当って、多く森潤三郎著『紅葉山文庫とお書物奉行』に拠ったが、加藤枝直との関係は東京大学史料編纂所蔵「要南甫日記」七冊が注意すべき文献である。森銑三著『人物逸話辞典』には、只

野真葛著「むかしばなし」(仙台叢書所収)、大槻文彦博士著「青木昆陽先生に就いて」(帝国教育会編)等が挙げであるが、なお詳細には、「近世人物研究資料綜覧」(『森銑三著作集』別巻所収)を見られたい。

南嶺遺稿 四卷

多田義俊 著

「南嶺子」に続く著書であるが、義俊は寛延三年に歿している。そこで遺稿として本書四卷が門人細谷文卿に依って編せられたので、これは知友良芸の序文や宝暦七年の文卿の跋文に依って知られる。然しこの稿は必しも全部未発表のものばかりでもない様である。巻頭の「尾張蓴菜云々」や「職原抄印板云々」「壺井翁学問」などは皆「蓴菜草紙」にある記事である。然し博識の人の心覚えの稿であるから、今読んでも興味のある記載もある。本式饅頭とか、香物附事とかいう食物の事や、今では古書を読む時より必要を感じない十干に就いて、十干之論、十干之伝など一応心得となる記事もある。故実の事など種々記事が多い。本書再刊に当っては、内閣文庫蔵刊本に拠って校正を行った。活字本としては『日本随筆全集』八、本大成一期十巻に収められて流布している。

多田義俊に就いては、本大成二期十四巻蓴菜草紙の解題の条に略述したから、ここには省略する。

南嶺遺稿評 一卷

伊勢貞丈 著

既に「南嶺子評」のある著者は、この遺稿に就いても一言なかる可からずと云う事で、巻一の「歌会の文台」以下巻四の「水干如木に就いて」の数条について、其の誤謬を弁駁したのが本書である。安永三年七月十九日に成っている。本書は安斎叢書十五巻に収められている。本書再刊に当っては、

内閣文庫蔵写本によって比較した。伊勢貞丈については大成二期十五卷「あるまし」の解題を見られる。
たい。

秉 穂 録 四卷

岡田新川 著

本書第一編は寛政六年仲夏の雲霞堂老人（正親町一品実連卿 享和二年九月廿九日薨 年八十五）

の序があり、夙夜和漢の群籍を涉獵しておこたらず、訛を訂し真を覈て本書を成した。其功勤矣と称して、其の書の益の多い事を賞して居られる。而して第二編の小引には、新川と共に博識を称せられた令弟恩田仲任により、兄は只書籍を嗜み異聞を愛し、得る所あれば之を筆録して一書を成して秉穂録と云うとある。而して此の第二編は、寛政十年に成り、二編四冊が刊行せられた事を述べている。

著者には本書刊行以前、寛政七年に書肆永楽屋東四郎から彼此合符二巻を刊行している。而して此の書は平家物語、宇治拾遺物語等の説話と支那古典の中から同話のものを対照して成ったもので、和漢の書に曉通しなければ出来ぬ書である。本書はこの彼此合符の背景となる多くの資料より、興味のある彼此の史実、制度、文字、訓詁、俗諺等を簡明に考証したものである。今巻頭の「藪にはかうの物」と云う条がある。これは十訓抄の「菅三品（菅原文時）の家に老たる尼ありと云条」とあるが、今一寸手許の十訓抄を見たが菅三品の条は同書に二条あるが、この老たる尼の条と云うのは一寸見当らなかった。然し「藪にはかうの物」と云う諺は、太田全斎の「諺苑」（古辞書叢刊一）にもあって、此は「南嶺子」から引用されている。本書には「南嶺子」の名は見えないが、別の処に「秋斎閑語に編笠云々」と云う項がある。恐らく著者は多田義俊の「南嶺子」も読んで居たのではあるまいかと思われる。今短文を引用して、其一端を示しこの紹介の筆を止めたいと思う。

明和年中に、婦人の相摸はやりし本あり。司馬溫公集に、論_ニ上元令_ニ婦人相摸_一状あり。唐土にもありし事なり。

本書再刊に当っては内閣文庫蔵版本によって比校を加えた。

岡田新川 名は宜生、字は挺之、通称仙太郎。尾張藩の世臣で、松平君山の門に学ぶ。明倫堂開黉と共に教授となり、督学ともなった。その間継述館総裁に遷ったこともある。一代の碩学で、特に博覧強記を以て聞えた。寛政十一年三月廿四日歿した、年六十三。名古屋市東区松山町慈眼院（曹洞宗）に葬せられた。素学新川居士と云う（『名古屋郷土先傑伝』）。其の伝記は『尾張名家誌』（細野要斎著）『名古屋市史学芸篇』等にある。

目次

昆陽漫錄	一
統昆陽漫錄	一九
統昆陽漫錄補	三元
南嶺遺稿	三毫
南嶺遺稿評	三九
秉穗錄	三七

昆陽漫錄

昆陽漫録序

敦書元文中、昆陽漫録一卷ヲ撰ブ。其後屢
小冊ヲ著ス。イマ再校シテ、或ハ去リ、或ハ
増シ、スベテ六卷トナシ、昆陽漫録ト名ク。

宝曆十三年二月十一日

青木敦書識

〔内閣文庫自筆献上本ニヨル〕

臣 敦書 アラハス所ノ昆陽漫紙一卷淨書

テ

上シム謹テソノ舛謬ヲタシシテ

上ト云

元文五年四月朔掌求書臣青水 敦書謹識



目次

卷之一

周易家語序	七	鯁涕	四
益田池	六	充國用	四
禁奢	三	金蚕	四
斷衣	三	九鼎	五
論語板	三	三智	五
松皮紙	三	得微雨蘇	六
鷗吻	三	鑄金為神主	六
節序交賀	三	金泥寫藏經	七
殺濤	三	乾坤通寶	七
鯖頭	三	茶	七
婕妤 ちゆう 好 こう	三	智医	六
糸煙	三	四至	六
買石	三	花	六
德政	三	鄧艾攻蜀	元
袁了凡	三	五等錢	元

宰相

方便囊

国字返簡

婦人不称行状

菟裘賦

上下

袍

琉球貢使

大管会

朱

捕賊与西土

宋代宿衛禁旅遷補之制

六枳関

避嫌名

鉛サシ槩サシ

上疏

卷之二

改元

三

疝

三

肥

三

繭紙

三

蠟紙

三

肉飛

三

千字文

三

蟹サシ

三

宋人

三

銜葉而嘯

三

剗サシ

三

雜戲

三

天平感宝

三

樂石

三

阿蘭陀文字

三

朝鮮諺文

三

稻葉熟水

四

雪水

三

三

三

三

三

三

三

三

三

三

三

三

三

三

四

四

四

